

2020東海村成人の集い 「自覚～20年分の思いを抱いて～」

【日時】1月11日(土) 午前10時～正午(午前9時受け付け)

【場所】東海文化センター

【問い合わせ】生涯学習課生涯学習担当(中央公民館内
☎282-3329)



【実行委員からのメッセージ】

令和最初の成人式である今回のテーマは「自覚～20年分の思いを抱いて～」です。

激動する時代の中を生きていく私たちは、大人の「自覚」、責任の「自覚」、環境の変化の「自覚」、立場の違いによる「自覚」など、さまざまな経験を通して、いろいろなことを自覚する必要があると思います。さらに、今回のテーマには、20年間支えてくださった両親や先生方、友人などへの感謝の思いも込めました。

※実行委員は、諏訪奏太郎さん(実行委員長)、吉田陸さん(実行委員副委員長)、小川幸太郎さん、小野智洋さん、鈴木竣介さん、飛田大地さん、西埜遥香さん、平野瑠里さん、益子千輝さんの9人です。

縄文人の衣「アンギン編み」

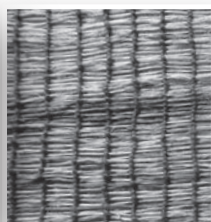
ふるさと歴訪
～歴史を再発見～

縄文人は「衣・食・住」の全てにわたり、自然の摂理に順応し、自然と共に暮らしていたことが、これまでの出土品などにより分かってきました。例えば食糧採集では、春には山菜を摘み、貝や魚を捕り、夏には魚を捕りに沖に出、秋には木の実やキノコ類を採り、冬には狩猟などを行っていたことが分かっています。

では、縄文人は一体、どのような衣服を身に着けていたのでしょうか。衣や布そのものは出土していませんが、炭化した布やひも、そして縄文土器の底に付いた圧痕から、当時すでに「編み物」があったことを知ることができます。縄文人には植物繊維を編む技があり、縄・ひも・編み布などを作っていました。編み方は、おそらく経糸に対して緯糸を交互に絡めていく「アンギン(編布)」と考えられています。これは刻み目を入れた横木に錘(孤槌)を使って編んでいく方法で、菰編みと同様な方法です。このような編み方で、縄文人の衣は作られていたと考えられます。



【アンギン編みの道具】



【アンギン編みの布】

糸の材料は、アサやカラムシなどの植物繊維です。中でもカラムシ(アオシ)が多く使われていました。カラムシはイラクサ科の多年草で、現在でも石神城跡など村内に自生している植物です。

この夏、私はカラムシから糸を引く「苧引き」に挑戦してみました。まずカラムシの葉をこそぎ落とし、緑色の表皮を剥ぎます。次に靱皮繊維を取り出し、青皮(青汁)を取ります。青皮を取り終えたら靱皮繊維を乾燥させ、細く裂いて繊維状にし、撚って糸とします。苧引きがうまくできると、一見、絹のような光沢のある繊維となります。

長い繊維を取るための採取時期は、6月～8月の花が咲く前が良いようです。9月以降になると、採れる繊維が短くなる上に、茶色がかってしまいます。縄文人は、採取時期なども熟知していたと思われる。したがって撚り糸づくりや布を製作する時期も決まっていたものと考えられます。

来年2月には、とうかいまるごと博物館事業の一環として「アンギン編み講座」を行う予定です。ぜひ縄文時代の編み物を体験してみてください。

東海村文化財保護審議会委員

宮田 裕紀枝